

授業科目	解剖学				
担当者	柴田雅朗			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頭・頸部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 到達目標

中枢神経系、末梢神経系ならびに口腔、喉頭を構成している各部の名称や機能を説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経系 I
1. 神経系の構成 2. 中枢神経系とは 3. 脊髄 4. 延髄と橋 5. 中脳
- 第2回 神経系 II
1. 間脳（視床と視床下部） 2. 大脳（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
- 第3回 脳神経
1. 脳神経の概略 2. 脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
- 第4回 脳室系と脳の血管
1. 脳室 2. 髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜） 3. 脳脊髄液
4. 脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウィリス動脈輪、硬膜静脈洞）
- 第5回 顔面と口腔の解剖
1. 口蓋 2. 口腔底 3. 舌と味蕾 4. 舌の発生 5. 咀嚼筋
6. 嚥下に働く筋
- 第6回 喉頭の解剖
1. 舌骨と喉頭の軟骨 2. 声帯靭帯と声帯ヒダ 3. 声門 4. 喉頭の筋
5. 喉頭の神経
- 第7回 平衡・聴覚器の解剖
1. 外耳・中耳・内耳の構造 2. 聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
- 第8回 三層性胚盤および鰓弓と総復習
1. 三層性胚盤 2. 鰓弓 3. 鰓弓由来の筋とその支配神経
総復習プリント配布

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容に沿ったプリントを配布し、プリントに従って授業を進めます。復習を必ず毎回やって、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教科書

書 名：PT・OT・STのための解剖学
著者名：渡辺正仁 監修
出版社：廣川書店

■ 参考図書

書名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DPとCPの関係はポリシーを参照してください。

授業科目	生理学				
担当者	宮井 潔			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体機能のしくみを知る基礎的な学問であるが、かなり範囲が広く深いので、各項目ごとにできるだけ基本的な考え方や重点事項を解説する。

■ 到達目標

各分野において、それぞれ基礎となる解剖学と、臨床医学特に内科学との関連づけを理解するように努める。

■ 授業計画

- 第1回 細胞と内部環境
- 第2回 血液・生体防御
- 第3回 循環系
小テストと解説
- 第4回 呼吸機能
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 胃臓と排泄
- 第7回 酸・塩基平衡
- 第8回 内分泌・代謝

■ 評価方法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の始めに見本をお見せしますが、セミリーフを用いた”マイキーワードノート”を作製して各教科で習ったキーワードをまとめることをおすすめします

■ 教科書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 生理学
著者名：岡田隆夫・長岡正範
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：スタンダード生理学
著者名：二宮石雄・安藤啓司・彼末一之・木川寛二
出版社：文光堂

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	病理学				
担当者	橋本和明			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾病の基礎知識を会得する。

■ 到達目標

疾病の基礎知識を会得し、個々の病気の理解を行うことを可能とする。

■ 授業計画

- 第1回 病因論・退行性病変
- 第2回 代謝異常・進行性病変
- 第3回 循環障害
- 第4回 免疫
- 第5回 炎症・感染症
- 第6回 腫瘍
- 第7回 放射線障害・老化
- 第8回 先天異常・奇形

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示をする。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学第3版
 著者名：梶原博毅・横井豊治
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	精神医学				
担当者	石倉 隆 平尾一幸 (オムニバス)			国家出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・精神医学の歴史や精神障害の成因、主な精神障害の症状や診断、リハビリテーションについて学ぶ。
- ・言語聴覚士が関わることの多い脳器質性精神障害について、その病態と診断、治療について学ぶ。

■ 到達目標

- ・精神医学の歴史や現状を知り、主な精神障害の症状や診断、支援の実際について知識を深める。
- ・脳器質性精神障害について、言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションにおける精神障害の概念
精神医学の歴史
- 第2回 精神障害の成因 3つの成因と相互関係
脆弱性-ストレス・モデル
- 第3回 精神機能の障害と精神症状
- 第4回 精神障害の治療とリハビリテーション
- 第5回 精神科保健医療と福祉、社会
- 第6回 脳器質性精神障害について
認知症とその特徴
- 第7回 大脳皮質の変性疾患
脳血管性認知症
- 第8回 大脳基底核の変性疾患

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で配布した資料やノートを用いて、毎回復習をしておくこと。

■ 教科書

書 名：指定なし
随時プリントを配布する

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑤
DPとCPの関係はポリシーを参照してください。

授業科目	リハビリテーション医学				
担当者	今井公一・辻郁・澤井里香子・柳千磨 他 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・理学療法の歴史や定義、理学療法過程、理論的な背景などについて学ぶ。(今井・柳)
- ・講義形式で、作業療法の歴史や理論的背景、種々の展開例から作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ。(辻ほか)
- ・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。(澤井)

■ 到達目標

- 1) 理学療法の治療体系について説明できる。2) 理学療法の対象について説明できる。3) リスク管理など理学療法の実際について説明できる。(今井・柳)
- 1) 作業療法の枠組みを概観できる。2) 作業療法の実践例を知ること、その専門性を理解できる。(辻ほか)
- 1) 言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患について、患者個人の全体像を把みアプローチするために必要な臨床上の考え方を身につける。(澤井)

■ 授業計画

- 第1回 理学療法の歴史と定義・対象 (今井)
- 第2回 理学療法の過程と治療体系 (今井)
- 第3回 理学療法の実際 (柳)
- 第4回 理学療法の実際 (柳)
- 第5回 作業療法概論
- 第6回 身体障害領域における作業療法の実際
- 第7回 精神障害領域における作業療法の実際
- 第8回 発達障害領域における作業療法の実際
- 第9回 リハビリテーション医学の概念と障害学 (澤井)
- 第10回 廃用症候群・過用 / 誤用症候群
中枢性神経麻痺の回復 (澤井)
- 第11回 脳卒中のリハビリ 運動学習 (澤井)
- 第12回 目標設定レベルの階層性 留守居能力
ケアマネジメント パーキンソン病のリハビリ (澤井)
- 第13回 神経疾患のリハビリ (ALS,SCD) ターミナルケア 呼吸リハ (澤井)
- 第14回 心理的問題について (障害受容、チームワークなど) (澤井)
- 第15回 授業全体の総合的演習 (澤井)
- 第16回 授業全体の総合的演習 (澤井)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

講義前にプリントを配布する。講義までに必ず読んでおくこと。(澤井)
講義終了後は復習し、分からないことがあれば次回の講義時に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書名：図説 パーキンソン病の理解とリハビリテーション

著者名：山永裕明、野尻晋一

出版社：三輪書店

書名：：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション

著者名：園田 茂

出版社：医学書院

書名：臨床リハ

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	耳鼻咽喉科学				
担当者	藤木暢也・岡野高之 他（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う

■ 到達目標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身につけることを目標とする

■ 授業計画

- 第1回 総論／鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（1）（藤木）
- 第2回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖（2）（藤木）
- 第3回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（1）（藤木）
- 第4回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療（2）（藤木）
- 第5回 聴器の構造と機能（外耳と中耳）（岡野）
- 第6回 聴器の構造と機能（内耳及び中枢伝導路）（岡野）
- 第7回 外耳・中耳の疾患とその治療1（岡野）
- 第8回 外耳・中耳の疾患とその治療2（岡野）
- 第9回 症候群性難聴 合併症・遺伝子異常・症状について
- 第10回 乳幼児の急性・滲出性中耳炎、発症メカニズム（起因菌など）と治療・予後
その他乳幼児が罹患後難聴を発症しやすい疾患について
- 第11回 新生児スクリーニング後の耳鼻咽喉科医の関わり（確定診断までの検査・診断後のフォロー）
- 第12回 内耳・平衡器の正常解剖と生理・機能
- 第13回 内耳・平衡器の奇形や疾患（発症の好発年齢やタイプ：性別など）
- 第14回 平衡器の検査（平衡機能検査の方法と評価、温度眼振・VEMP検査の方法と評価）
- 第15回 良性発作性頭位めまい症、メニエール病、前庭神経炎の症状と治療と予後

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後には、学習内容について必ず復習をしておくこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学
 著者名：鳥山 稔
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	臨床神経学				
担当者	小倉光博			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患を分かりやすく説明する。あわせて、神経解剖、神経性生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

- 第1回 神経解剖・神経生理
- 第2回 神経解剖・神経生理
- 第3回 脳血管障害
- 第4回 脳血管障害
- 第5回 脳腫瘍
- 第6回 脳腫瘍
- 第7回 頭部外傷
- 第8回 頭部外傷
- 第9回 小児頭部外傷・先天奇形
- 第10回 神経血管症候群
- 第11回 パーキンソン病
- 第12回 認知症
- 第13回 頭痛
- 第14回 神経変性疾患・感染症
- 第15回 神経画像診断

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業復習をし、分からないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：絵で見る脳と神経
 著者名：馬場元毅
 出版社：医学書院

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	臨床歯科医学				
担当者	山西 整			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な歯科的知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科的知識の習得と理解

■ 授業計画

- 第1回 歯科概論
歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
- 第2回 歯と歯周組織について 1
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第3回 歯と歯周組織について 2
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周炎、歯列不正、歯の欠損）
- 第4回 口腔、顎、顔面について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第5回 顎関節、唾液腺について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第6回 口腔ケアについて
歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
- 第7回 口蓋裂治療と ST
- 第8回 口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次回の講義で質問をすること

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	口腔外科学				
担当者	吉本 仁			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口腔・顎・顔面の構造と機能および口腔・顎・顔面領域の疾患について講義をおこなう。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な口腔・顎・顔面の構造および口腔・顎・顔面領域の疾患について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 口腔・顎・顔面領域の先天異常、変形
- 第2回 顎・口腔領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
- 第3回 顎・口腔領域の嚢胞性疾患
- 第4回 顎・口腔領域の損傷・外傷、顎関節疾患
- 第5回 顎・口腔領域の神経疾患、唾液腺疾患
- 第6回 顎・口腔領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
- 第7回 口腔、顎、顔面領域の手術と機能回復
- 第8回 試験と解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回、講義の最後に小テストをおこなうので、講義後の自学自習をおこなう。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
 著者名：道 健一
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：口腔外科学
 著者名：小野尊睦
 出版社：金芳堂

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）				
担当者	尾崎充宣	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士国家試験出題基準に基づいて神経解剖、生理を概説する

■ 到達目標

国家試験合格に必要な知識の習得と実地臨床に応用できる神経学への理解を目指す

■ 授業計画

- 第1回 神経系解剖 1（頭皮、頭蓋骨、髄膜、大脳、小脳、脳幹）
- 第2回 神経系解剖 2（脳血管、脳脊髄液、脊髄）
- 第3回 神経組織と電気生理
- 第4回 大脳皮質・白質の生理
- 第5回 大脳基底核、脳神経、脊髄神経、自律神経の解剖、生理
- 第6回 感覚器の生理（聴覚、視覚、体性感覚）
- 第7回 神経系解剖、生理のまとめ
- 第8回 大脳基底核、視床、脳幹、小脳の病態
- 第9回 末梢神経（脳神経、脊髄神経、自律神経）の病態
- 第10回 脊髄の病態
- 第11回 高次脳機能障害
- 第12回 運動機能障害
- 第13回 感覚障害、自律神経障害
- 第14回 生理学的検査、画像検査
- 第15回 演習問題

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後、必ず復習をしておくこと

■ 教科書

書 名：絵でみる脳と神経
 著者名：馬場元毅
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）				
担当者	藤井章乃			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学の基本である人格理論、発達理論を中心に学習する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考える。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学概論
- 第2回 心とは何か
- 第3回 心理援助演習
- 第4回 フロイトの精神分析理論Ⅰ
- 第5回 フロイトの精神分析理論Ⅱ
- 第6回 交流分析理論
- 第7回 ユングの分析心理学理論Ⅰ
- 第8回 ユングの分析心理学理論Ⅱ
- 第9回 ロジャーズの自己理論
- 第10回 エリクソンの心理・社会的発達理論
- 第11回 人格理論 マーラー／ウィニコット／フロイト以降の人格理論
- 第12回 その他
- 第13回 精神医学1
- 第14回 精神医学2
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験80% 提出課題20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑥
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）				
担当者	藤井章乃			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を中心に学び、自己理解を深め、援助技術を具体的に学ぶ。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考える。

■ 授業計画

- 第1回 心理アセスメントⅠ パーソナリティ理論
- 第2回 心理アセスメントⅡ 質問紙法
- 第3回 質問紙法 実習
- 第4回 心理アセスメントⅢ 投映法
- 第5回 投映法 実習
- 第6回 クライアント中心療法
- 第7回 傾聴訓練①
- 第8回 傾聴訓練②
- 第9回 精神分析療法・分析心理療法
- 第10回 芸術療法
- 第11回 遊戯療法
- 第12回 家族療法
- 第13回 行動療法
- 第14回 認知行動療法
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験80% 提出課題20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出し、実習後には結果の分析を提出する場合がある。

■ 教 科 書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕・松本真理子・松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑥
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	生涯発達心理学 I (乳幼児期)				
担当者	工藤芳幸	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

生涯発達心理学とは、生まれてから死ぬまでの人の一生において、環境（人や物、社会）との相互作用を通じた時系列的な変化を扱う。いわば生老病死、生成と喪失の心理学である。第6回までは、主に年齢に区切って子どもの発達像を学ぶ。第7回からは、アタッチメントや認知、感情、社会性、自己といった領域ごとの発達について理解を深める。

■ 到達目標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：生涯発達心理学の概要、発達の可塑性、発達段階、横断研究と縦断研究について講義する。また受講に当たっての留意事項、学習方法について話したい。
- 第2回 胎児期～新生児期の発達：胎児期、新生児期の子どもの認知発達や言語発達、運動発達について取りあげる。
- 第3回 乳児期の子どもの発達：乳児期の子どもの認知・言語・運動・社会性の発達について学ぶ。
- 第4回 幼児期前半の子どもの発達：幼児期前半の子どもの認知・言語・運動・社会性について学ぶ。
- 第5回 幼児期後半の子どもの発達：幼児期後半の子どもの認知・言語・運動・社会性について学ぶ。
- 第6回 乳幼児期のまとめとして、乳幼児期の小テストを実施する。
- 第7回 認知の発達：乳幼児の認知の発生について理論的体系を築いた Piaget について取りあげる。第5回までの講義とリンクさせながら、基本的な考え方について解説する。
- 第8回 アタッチメントと関係性の発達：Bowlby や Ainsworth が確立したアタッチメント理論について取りあげ、母子関係における愛着形成やアタッチメントのタイプ、病理について講義する。
- 第9回 感情の発達：気分・感情・情動・情緒といった言葉で表される状態の発達を学ぶ。
- 第10回 遊びの発達：遊びは総合力である。子どもは手持ちの力を発揮して多様に遊ぶ。遊びを媒介にして、認知や言語、社会性や感情制御といった力を身につけていく。遊びについて考えてみたい。
- 第11回 自己・パーソナリティの発達：自分という意識や性格が形成される過程について講義する。
- 第12回 社会性の発達：他者との関係の中で生きること、向社会的行動、道徳性の発達、レジリエンスという概念などを取りあげる。
- 第13回 知的発達：知能測定の歴史的背景や様々な知能理論、知的能力観（何を知的な能力だと考えているか）、認知能力の生涯発達、注意や記憶機能の発達について取り上げる。
- 第14回 児童期以降の関係性の広がり：児童期以降の認知・言語・社会性、仲間関係、親になることによる発達、大人の自己発達を取り挙げる。
- 第15回 小テストと全体のまとめ：講義前半で第7回から第14回までの講義内容について、小テストを実施する。最後に全体のまとめを行う。

■ 評価方法

筆記試験100%（期末試験80%、小テスト20%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

テキストは一読しておくことをお勧めします。また、15回の講義スケジュール中に小テストを2回実施しますので、毎回ごとに講義内容の復習しておいてください。

■ 教科書

書名：生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く
著者名：鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ
出版社：有斐閣

■ 参考図書

書名：写真でみる乳幼児健診の神経学的チェック法 改訂8版
著者名：前川喜平・小枝達也
出版社：南山堂

書名：乳幼児のこころ 子育て・子育ての発達心理学
著者名：遠藤利彦・佐久間路子・徳田治子・野田淳子
出版社：有斐閣

■ 留意事項

指定テキストも使用しますが、本講の目的に沿ってテキスト以外の内容も取り挙げますので、各回に配布するハンドアウトをベースに講義をします。資料の量が多めなのでファイリングすることをお勧めします。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）				
担当者	森田喜治・森定美也子 他（オムニバス）		国試出題基準		
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・人間関係論から見た人間の発達（森田）
- ・老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。老年期のエイジングとパーソナリティーについて理解を深め、ST が如何に対応すべきかを学んで頂きたい。（森定 他）

■ 到達目標

- ・生物学的発達の理解だけでなく、人間であるがゆえに重要となる人間関係の観点から発達を理解する。
- ・各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることが出来る。

■ 授業計画

- 第1回 発達について、人間関係学、間主観性、精神分析からの理解（森田）
- 第2回 乳幼児期の人間関係の発達と機能の発達との関連（森田）
- 第3回 児童期、思春期の関係の発達と精神的成長との関連（森田）
- 第4回 児童期、思春期の問題形成とその心理療法（森田）
- 第5回 青年期、成人期の人間関係の発達（特に家族との関係）（森田）
- 第6回 青年期、成人期の人間関係上の問題とその心理療法（特に家族との関係）（森田）
- 第7回 成人期、中年期の人間関係の発達（特に夫婦の関係と、子どもとの関係）（森田）
- 第8回 成人期、中年期の人間関係上の問題とその心理療法（老いの受け入れと、老いの意味）（森田）
- 第9回 老年期の位置づけとコミュニケーションの基本（森定）
- 第10回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-①（森定）
- 第11回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-②（森定）
- 第12回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-③（森定）
- 第13回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-④（森定）
- 第14回 死への対応1（講師非公表）
- 第15回 死への対応2（講師非公表）

■ 評価方法

レポート100%（尚、レポートは心理学的観点からの自分史理解になりますので専門書の記述も必要です）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

森田：生涯発達という分野は、それぞれの先生によってさまざまではありますが、私のスタイルとしましては、多分に現象学的な見方からの人間関係学を主体としています、その意味で、特に誰のというのでもありませんが、人間関係に関する知識を得るためのあらゆる書物が予習、復習で必要になると思います。特に、現在成人期に達している事故に目を向け、「私」を分析していく癖をつけるために、どのような分野の本でも構いませんが、自分自身を振り返るのに必要な書物はなんでも予習としてお読みください。インターネットの発達によって、知識に関することはいくらでも探すことができますが、分野違いの本の中にも、人を知るための様々な切り口があります。それを知るための学習が、すべて予習であるといえます。最後のレポートで自分を見つめるときに、その予習してきたものが以下に現れるかを評価の基準としていきたいと思っています。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

毎年思うことですが、授業態度は、静かで、おとなしいのがいいというわけではない。教わること、学問に対する忠実さを求めるわけではない。むしろ、学問に対する貪欲さからの質問等があるとさらに良い。したがって、ディスカッションできるように心がけてもらいたい。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）				
担当者	田中大貴			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学ぶ。前期は感覚・知覚・学習・記憶について習得する。

■ 到達目標

人間がどのように外の世界をとらえているのか（感覚・知覚）、またどのように新しい行動や知識を獲得していくのか（学習・記憶）を理解できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 心理学とは何か？
- 第2回 感覚の分化と統合Ⅰ（感覚・知覚）
- 第3回 感覚の分化と統合Ⅱ（感覚・知覚）
- 第4回 視知覚Ⅰ（感覚・知覚）
- 第5回 視知覚Ⅱ（感覚・知覚）
- 第6回 古典的条件付け（学習）
- 第7回 オペラント条件付け（学習）
- 第8回 強化スケジュール（学習）
- 第9回 技能学習（学習）
- 第10回 社会的学習（学習）
- 第11回 記憶の過程（記憶）
- 第12回 短期記憶（記憶）
- 第13回 長期記憶（記憶）
- 第14回 記憶の神経過程（記憶）
- 第15回 前期のまとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通しておくこと（参考図書の該当部分も参照のこと）。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：心理学（第5版）
 著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）				
担当者	田中大貴	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学について学ぶ。後期は、より高次の認知過程を必要とする思考・言語について習得する。

■ 到達目標

学習・認知心理学において扱われる人間の問題解決の仕方や知識の構造（思考）、また言語を獲得するにあたり必要な認知発達（言語）に関して理解できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 前期のおさらい
- 第2回 問題解決（思考）
- 第3回 問題解決と認知発達（思考）
- 第4回 知識（思考）
- 第5回 推論と発見（思考）
- 第6回 言語獲得（言語）
- 第7回 非言語コミュニケーション（言語）
- 第8回 前期・後期のまとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通しておくこと（参考図書の該当部分も参照のこと）。

■ 教科書

■ 参考図書

書名：心理学（第5版）
 著者名：鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
 出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	心理測定法				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

- 第1回 心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性
- 第2回 精神物理学的測定法（1）—調整法
- 第3回 精神物理学的測定法（2）—極限法と恒常法
- 第4回 尺度構成について
- 第5回 一対比較法と感覚尺度
- 第6回 Weber の法則について
- 第7回 Fechner の法則について
- 第8回 Weber-Fechner の法則と音響学の関係
- 第9回 Stevens のベキ法則について
- 第10回 信号検出理論について
- 第11回 統計学の基礎
- 第12回 各種統計学の考え方
- 第13回 各種心理テスト法の特徴について
- 第14回 認知能力とことばの心理
- 第15回 心理測定法の総復習

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語学 I (音声学・形態論)				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の音声・文字について、習熟する。

■ 授業計画

日本語の音声・文字といった「表現手段」について習熟する。

- 第1回 言語とは何か
- 第2回 構音器官について
- 第3回 国際音声記号の考え方
- 第4回 発声（有声・無声）と声帯の特性
- 第5回 調音方法の詳細
- 第6回 調音位置の詳細
- 第7回 日本語の母音について
- 第8回 日本語の無声阻害音の発音について
- 第9回 日本語の濁音の特徴
- 第10回 その他の日本語分節音の特徴
- 第11回 アクセントとイントネーションについて
- 第12回 東京方言とアクセント核
- 第13回 日本語のそのほかの方言アクセントとイントネーション
- 第14回 文字について
- 第15回 漢字の種類とかな文字の特徴

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟する。

■ 授業計画

日本語の持つ膠着性・主辞後置性といった性質および意味現象について理解を深める。

- 第1回 形態素の概念
- 第2回 日本語の語種について
- 第3回 同意語と下位語・語彙の構造について
- 第4回 形態素と語の関係
- 第5回 日本語の複合名詞・複合動詞について
- 第6回 動詞形態素の特性
- 第7回 テンスとアスペクト
- 第8回 ヴォイスと極性
- 第9回 特殊なヴォイスとモダリティ
- 第10回 日本語の構造
- 第11回 生成文法の考え方
- 第12回 日本語の意味について
- 第13回 比喩と言語理解
- 第14回 ムードとダイクシス
- 第15回 その他の意味現象

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	音響学 I (一般音響学)				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音の周波数・音圧に関する基本事項を理解する。

■ 到達目標

周波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通する。

■ 授業計画

聴覚障害を理解する上で不可欠な概念である周波数・音圧について理解する。

- 第1回 音とは何か
- 第2回 振動の伝播と音圧波形
- 第3回 原波形の見方：音圧波形と粒子速度波形
- 第4回 周波数の可聴範囲と周波数・周期の計算
- 第5回 波長と周波数の計算
- 第6回 周波数レベル：オクターブの概念
- 第7回 音の高さ：mel 尺度
- 第8回 音の強さと音圧
- 第9回 デシベルの基本計算
- 第10回 強さレベルと音圧レベル
- 第11回 聴力レベルと聴覚検査関係
- 第12回 感覚レベルと聴覚障害
- 第13回 等ラウドネス曲線と音の大きさ
- 第14回 ソーン尺度と音圧との関係
- 第15回 複合音の特性

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	音響学Ⅱ (音響音声学・聴覚心理学)				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の音響的特徴について理解する。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解する。

■ 授業計画

- 音声の音響的特性について
- 第1回 調波複合音と非調波複合音
 - 第2回 倍音と missing fundamental
 - 第3回 聴覚の時間説と場所説
 - 第4回 線スペクトルと連続スペクトル
 - 第5回 短時間スペクトルについて
 - 第6回 音源フィルタ理論
 - 第7回 声帯のスペクトルの特性
 - 第8回 共鳴という現象
 - 第9回 閉管と開管の共鳴特性
 - 第10回 中舌母音の共鳴特性の計算
 - 第11回 日本語5母音の音響特性
 - 第12回 スペクトログラムと接近音の音響特性
 - 第13回 摩擦音と破裂音の音響特性
 - 第14回 音声知覚について
 - 第15回 マスキングとデジタル音声処理

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③⑤⑦
DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語発達学				
担当者	齋藤典昭			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもの発達の中でも0歳～学齢までの言語の発達について学びます。前言語期・単語獲得期・前期構文獲得期・中期構文獲得期と進んでいきます。コミュニケーションはことばの前からあるのだろうか？どんなことばから覚えていくのだろうか？話せるようになるのはいつ頃か？字を読んだり書いたりできるのはいつ頃か？ことばを育むにはどうしたらよいのか。これらのことは、ことばの障害とどのような関係にあるのか。といったことを学びます。

■ 到達目標

1. 年齢を聞いて、その年齢の言語発達について説明できる。
2. 子どもを観察し、その子の言語発達について概要を評価できる。
3. 言語発達についての基礎知識を獲得したことで、言語発達障害が理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス。言語発達の大きな流れ。
- 第2回 コミュニケーションの発達。
- 第3回 コミュニケーションの発達。音声知覚の発達。
- 第4回 音声知覚の発達。小テスト。
- 第5回 小テスト解題。音声知覚の発達。映像資料視聴。
- 第6回 言語音の産生。喃語の発達。
- 第7回 喃語の発達。
- 第8回 初語。
- 第9回 語彙獲得の第1第2段階。
- 第10回 語意味の獲得。
- 第11回 統語の発達。形態の発達。
- 第12回 会話能力の発達。
- 第13回 会話能力の発達。語りの能力の発達。
- 第14回 読み書き能力の発達。
- 第15回 言語発達における危険な徴候。質問－応答関係検査。

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ 次回の授業内容と準備を伝えるので、それにそって教科書、資料等を事前に読んでおくこと。
- ・ 子どもの言語発達の視野を広げるために、URL：<http://www.playingwithwords365.com> の記事 speech and language 101を参照しますので、事前に目を通して慣れておいてください。

■ 教科書

--

■ 参考図書

書名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 留意事項

授業の進行に応じて補講が加わる場合があります。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	リハビリテーション概論				
担当者	吉機俊雄・ST教員（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到達目標

リハビリテーションの考え方について知る。

言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。

言語聴覚障害の方との対話を通じて、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
対話会を振り返って -コミュニケーションの課題-

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。

参加される方の時代背景（戦前・戦後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑥⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語聴覚障害学概論				
担当者	森田婦美子・片岡紳一郎・ST 教員（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖及び人体機能のしくみについての導入
- ・ 言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う
- ・ I 期実習ガイダンス

■ 到達目標

- ・ 神経系や発声発語器官、頭頸部及び人体機能のしくみについての概要を理解する
- ・ 様々な臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る
- ・ 実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける

■ 授業計画

- 第1回 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖（大根）
- 第2回 人体機能のしくみ：心臓（森田）
- 第3回 人体機能のしくみ：腎臓（森田）
- 第4回 人体機能のしくみ：肝臓（森田）
- 第5回 人体機能のしくみ：膵臓（森田）
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（1）
- 第7回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（2）
- 第8回 言語聴覚士現場の声をきく会から学んだこと 発表
- 第9回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義および演習（1）（片岡）
- 第10回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義および演習（2）（片岡）
- 第11回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義および演習（3）（片岡）
- 第12回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（1）（森田）
- 第13回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（2）（森田）
- 第14回 I 期実習ガイダンス 感染症について（1）（森田）
- 第15回 I 期実習ガイダンス 感染症における注意点（2）（森田）

■ 評価方法

小テスト 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教科書

書 名：図解 言語聴覚療法技術ガイド
 著者名：深浦順一 編集主幹
 出版社：文光堂

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習 I シラバスも参照すること。
ST 専任教員による補講 3 コマあり。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦
DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語聴覚障害診断学				
担当者	森田婦美子・高木卓司・中村靖子 他（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、障害レベルに応じた評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。運動障害性発話障害の原因と、それに応じた発声発語器官の形態。機能の検査、発話の検査による評価と訓練、および発話補助手段について述べる。（講師非公表）
- ②一日実習の内容についての概略説明。実際の患者に対して持つべき視点、経口摂取の重要性について検討（ロールプレイ）（高木）

■ 到達目標

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価ができるようになる。（講師非公表）
- ②患者やその家族、他職種から“必要とされる ST”になるために必要な要素を各個人が認識する。（高木）

■ 授業計画

- 第1回 導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について（講師非公表）
- 第2回 発話の検査（標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査）（講師非公表）
- 第3回 呼吸機能、発声機能の評価（講師非公表）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の評価（講師非公表）
- 第5回 口腔構音機能の評価（運動範囲）（講師非公表）
- 第6回 口腔構音機能の評価（運動速度）（講師非公表）
- 第7回 口腔構音機能の評価（筋力）（講師非公表）
- 第8回 機器を用いた検査、反射検査など（講師非公表）
- 第9回 VTRによる症例呈示と検査の実施（講師非公表）
- 第10回 VTRによる症例呈示と検査の要約（講師非公表）
- 第11回 評価結果のまとめと所見作成（講師非公表）
- 第12回 評価結果の分析と考察（講師非公表）
- 第13回 一日実習を行う目的と動機の解説。その他実習施設に関する情報提供（高木）
- 第14回 経口摂取の重要性についてのグループディスカッション及び多数の視点からの解説（高木）
- 第15回 II期実習ガイダンス カルテのみかた（森田）
- 第16回 嚥下実習（中村）

■ 評価方法

成績は、定期試験100%の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予め授業前にテキストの準備物と評価手順と基準の箇所について目を通してきてください。授業後に配布資料とテキストを読んで復習しておいてください。

■ 教科書

書 名：標準ディサースリア検査

著者名：西尾正輝

出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習Ⅱのシラバスも参照すること

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）				
担当者	大西 環			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 到達目標

失語症の言語症状やタイプ分類等、失語症の基礎および観察の仕方を理解する。

■ 授業計画

- | | | |
|------|-----------|---------------------|
| 第1回 | 失語症とは | |
| | 定義と障害の特徴 | 臨床の流れ |
| 第2回 | 失語症の言語症状 | 流暢性発話と非流暢性発話 |
| 第3回 | 失語症の言語症状 | 発話症状（各症状と用語の解説） |
| 第4回 | 失語症の言語症状 | 発話症状（各症状と用語の解説） |
| 第5回 | 失語症の言語症状 | 聴覚的理解障害（各症状と用語の解説） |
| 第6回 | 失語症の言語症状 | 読み書き障害（各症状と用語の解説） |
| 第7回 | 失語症のタイプ分類 | 古典分類について |
| 第8回 | 失語症のタイプ分類 | 古典分類について |
| 第9回 | 失語症のタイプ分類 | 皮質下性失語、交叉性失語、小児失語ほか |
| 第10回 | 純粹失読と失読失書 | |
| 第11回 | 症状の観察の仕方 | |
| 第12回 | 症状の観察の仕方 | |
| 第13回 | 症状の観察の仕方 | |
| 第14回 | 復習 | |
| 第15回 | まとめ | |

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後復習し、問題点は次回の授業時に質問すること。

■ 教科書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
 著者名：竹内愛子 川内十郎 編著
 出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	大根茂夫・中村靖子（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（1）
- 第4回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（2）
- 第5回 WAB 失語症検査の概略
- 第6回 重度失語症検査の概略
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA - ST）の概略
- 第8回 失語症語彙検査の概略
- 第9回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
- 第10回 掘り下げ検査（失語症構文検査、トークンテスト）の概略
- 第11回 掘り下げ検査（語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査）の概略
- 第12回 検査演習（1）
- 第13回 検査演習（2）
- 第14回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第15回 評価サマリーの書き方

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）、実技試験（100点満点） 筆記試験、実技試験とも60点以上が合格

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査を行うこと。検査練習は空き時間を有効に使うこと。すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書名：なるほど!失語症の評価と治療 -検査結果の解釈から訓練法の立案まで-
著者名：編著 小嶋知幸 執筆 大塚裕一 宮本恵美
出版社：金原出版株式会社

書名：コツさえわかればあなたも読める リハに役立つ脳画像
著者名：大村優慈
出版社：株式会社メジカルビュー社

■ 参考図書

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	高次脳機能障害 I (概論)				
担当者	森岡悦子・中谷謙 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、注意、記憶、認知、行為、視空間認識、行為、遂行など、大脳の機能を理解し、それらが損傷された結果生じる高次脳機能障害の臨床像を学ぶ。

■ 到達目標

1. 大脳機能について、正常のメカニズムを理解することができる。
2. 各々の高次脳機能障害について、症状を整理し、臨床像を説明することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と情報処理システム (森岡)
- 第2回 注意の機能と特性 (森岡)
- 第3回 記憶の種類、記憶の回路とメカニズム、病変別記憶障害の特徴 (森岡)
- 第4回 失行、行為、行動の障害 (中谷)
- 第5回 失認と関連症状 (森岡)
- 第6回 無視症候群・外界と身体の処理に関わる空間性障害 (中谷)
- 第7回 前頭前野と遂行機能障害 (森岡)
- 第8回 外傷性脳損傷による高次脳機能障害 (森岡)

■ 評価方法

定期試験80%、平常点 (レポート、小テスト、授業への積極性) 20%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

授業内に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：高次脳機能障害学
 著者名：長谷川賢一
 出版社：建帛社

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害の障害メカニズムを理解し、各検査の目的と実施方法、結果の解釈法を学び、障害像の捉え方を理解する。また、症状分析に必要な情報と合わせて考察し、高次脳機能障害の症状のまとめ方を修得する。

■ 到達目標

1. 高次脳機能検査の目的と実施方法を学び、正しく施行することができる。
2. 症状に応じて、必要な掘り下げ検査を選択し、実施することができる。
3. 検査結果を、正しく解釈し、障害像を捉えることができる。
4. 検査結果から高次脳機能障害の症状をまとめることができる。

■ 授業計画

- 第1回 注意機能（1）：注意の特性と、注意機能障害の臨床像（森岡）
 第2回 注意機能（2）：標準注意検査法・標準意欲評価法の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
 第3回 記憶（1）：症状と病巣との関係（圓越）
 第4回 記憶（2）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の目的と手順の理解（圓越）
 第5回 記憶（3）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の演習と結果の解釈、症状のまとめ（圓越）
 第6回 失行と行為・行動障害：評価と診断（森岡）
 第7回 失認（1）：視覚失認、相貌失認、地誌の見当識障害、聴覚失認、触覚失認の臨床像（森岡）
 第8回 失認（2）：標準高次視知覚検査（VPTA）の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
 第9回 視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、パリント症候群（中谷）
 第10回 視空間障害（2）：BIT 行動性無視検査の目的と実施手順の理解（中谷）
 第11回 視空間障害（3）：BIT 行動性無視検査の演習と、結果の解釈、症状のまとめ（中谷）
 第12回 遂行機能：前頭葉機能との関連、外傷性脳損傷による高次脳機能障害（森岡）
 第13回 高次脳機能障害検査の解釈と演習（1）（森岡）
 第14回 高次脳機能障害検査の解釈と演習（2）（森岡）
 第15回 高次脳機能障害検査の解釈と演習（3）（森岡）

■ 評価方法

定期試験80%、平常点（レポート、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書名：標準言語障害学 高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代・阿部晶子 編集
出版社：医学書院

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語発達障害 I (援助法・基礎)				
担当者	工藤芳幸・中村靖子 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な観察の視点・方法とそれらを言語化・文字化してまとめ、実習日誌や報告書やカルテ等を通して伝えることを学ぶ。第1回～第10回まで(工藤)は、観察と記録の初歩的な事項と、主に小児領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。第11回～第15回まで(中村)は、成人領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。

■ 到達目標

臨床実習 I の日誌作成を念頭に、基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授業計画

- 第1回 オリエンテーション：人間の行動を観察することと記録することについて (工藤)
- 第2回 小児領域の臨床を見る：VTRによる観察とメモ (講義・演習) (工藤)
- 第3回 行動観察のため方法論：行動という視点から観察する (工藤)
- 第4回 発達の視点を持って観察・記述する1 (ケース1 講義・演習) (工藤)
- 第5回 発達の視点を持って観察・記述する2 (ケース1 講義・演習) (工藤)
- 第6回 発達の視点を持って観察・記述する3 (ケース2 講義・演習) (工藤)
- 第7回 発達の視点を持って観察・記述する4 (ケース2 講義・演習) (工藤)
- 第8回 ロールプレイによる観察と記録1 (工藤)
- 第9回 ロールプレイによる観察と記録2 (工藤)
- 第10回 小児領域の観察と記録 まとめと文章作成上のフィードバック (工藤)
- 第11回 成人の観察と記録 概要及び視点について (中村)
- 第12回 成人の観察と記録1 (中村)
- 第13回 成人の観察と記録2 (中村)
- 第14回 成人の観察と記録 解説 (中村)
- 第15回 成人の観察と記録 まとめ (中村)

■ 評価方法

提出物100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組んでもらう課題を出す予定です。

■ 教科書

書 名：言語聴覚障害診断
 著者名：都築澄夫 大塚裕一
 出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑦

DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）				
担当者	齋藤典昭・吉田紀子（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

■ 到達目標

言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害概論
- 第2回 知的能力障害
- 第3回 ASD（自閉症スペクトラム障害）①
- 第4回 ASD（自閉症スペクトラム障害）②
- 第5回 ADHD（注意欠如多動性障害）①
- 第6回 ADHD（注意欠如多動性障害）②
- 第7回 LD（学習障害／発達性ディスレクシア）①
- 第8回 LD（学習障害／発達性ディスレクシア）②
- 第9回 SLI（特異的言語発達障害）
- 第10回 言語発達障害のまとめ
- 第11回 姿勢・運動の発達 基礎知識
- 第12回 脳性麻痺・重複障害 定義
- 第13回 脳性麻痺・重複障害 評価
- 第14回 脳性麻痺・重複障害 支援
- 第15回 保育所見学学習 記録作成・提出

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書「言語発達障害学」の該当箇所を読んでおくこと

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学

著者名：藤田郁代 監修

出版社：医学書院

書 名：絵でわかる言語障害 第2版

著者名：毛束真知子

出版社：学研

書 名：乳幼児の発達障害診療マニュアル 健診の診かた・発達の促しかた

著者名：洲鎌盛一

出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：言語聴覚士のための言語発達障害学第2版
著者名：石田宏代，石坂郁代
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

保育所見学学習について：少子高齢化社会で子どもさんと直に接する機会は減っています。子どもさんの発達を学ぶ機会として設定しています。6月頃に実施する予定です。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語発達障害Ⅲ (評価法 - 基礎)				
担当者	大谷多加志・工藤芳幸 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対象者の発達状態を適切に理解することは、小児の言語治療を行う上で非常に重要なことである。本講では小児の発達評価に最もよく用いられる検査の1つである新版 K 式発達検査2001の実施・評価を学習することを通して、小児の発達アセスメントにおける基礎的理解を深めていく (大谷)。後半は特に言語面の評価方法を深めていく。ここでは絵画語い発達検査 (PVT-R)、LC スケール (言語・コミュニケーション発達スケール) を取り挙げ、言語学的四側面の発達の理解や言語理解・言語表出・コミュニケーションの発達アセスメントを学ぶ。また、検査結果を統合・解釈し、指導目標を設定するプロセスを学ぶ (工藤)。

■ 到達目標

小児の発達アセスメントに関する基礎知識の習得、および新版 K 式発達検査2001の概要と実施・評価の学習 (第1回～第9回)、小児の言語・コミュニケーション発達に関する評価法および指導目標設定についての基礎知識の習得 (第10回～第15回)。

■ 授業計画

- 第1回 発達アセスメントの意義と留意点 (大谷)
- 第2回 新版 K 式発達検査の概要 (大谷)
- 第3回 検査の実施手順と評価① 乳児 (大谷)
- 第4回 検査の実施手順と評価② 幼児 (大谷)
- 第5回 検査の実施手順と評価③ 幼児 (大谷)
- 第6回 検査の実施手順と評価④ 幼児 (大谷)
- 第7回 検査結果に基づく発達評価と助言、支援① (大谷)
- 第8回 検査結果に基づく発達評価と助言、支援② (大谷)
- 第9回 事例から考える発達評価・発達支援 (大谷)
- 第10回 ことばの理解に関する検査法 (絵画語い発達検査: PVT-R) (工藤)
- 第11回 LC スケール (言語・コミュニケーション発達スケール) の概要 (工藤)
- 第12回 LC スケールの実施手順と評価① 幼児期前半 (工藤)
- 第13回 LC スケールの実施手順と評価② 幼児期後半 (工藤)
- 第14回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定① (工藤)
- 第15回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定② (工藤)

■ 評価方法

レポート (100%) により評価する (第1回～第9回、大谷)。講義時間内に実施する提出課題 (100%) により評価する。(第10回～第15回、工藤)。科目全体の最終的な評価は大谷担当分で60%、工藤担当分で40%とする。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

後期科目の言語発達障害Ⅳにて、実際に検査及び報告書作成をします。採点や記載法について、授業ごとによく復習して後期に備えてください。

■ 教科書

書 名：新版 K 式発達検査2001実施手引書
 著者名：生澤雅夫・松下裕・中瀬惇 (編著)
 出版社：京都国際社会福祉センター

■ 参考図書

書名：言語・コミュニケーション発達の理解と支援プログラム-LC スケールによる評価から支援へ-
著者名：大伴潔・林安紀子・橋本創一・菅野敦（編著）
出版社：学苑社

書名：新版K式発達検査法 2001年版 発達アセスメントと支援
著者名：松下裕・郷間英世（編著）
出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

第1回～第9回までの講義内では新版K式発達検査2001の検査用具を使用する。事前準備等については別途連絡したい。第10回～第15回までの講義で使用するLCスケール演習用の検査用紙については事前購入ではなく、講義内資料として配布する。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）				
担当者	齋藤典昭・工藤芳幸（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・言語検査である「国リハ式<S-S>法」言語発達遅滞検査・訓練を学ぶ（齋藤）
- ・言語発達障害Ⅲで学んだ新版K式発達検査2001を用いて実際のこどもに検査を実施し、報告書を作成する（工藤）

■ 到達目標

1. 各検査の概要を述べるができる <S-S法>
2. 各検査を実施することができる <S-S法>
3. 検査所見を作成することができる <S-S法>
4. 訓練案を作成することができる <S-S法>
5. 新版K式発達検査2001による全体発達評価の結果解釈、支援仮説を立てることができる

■ 授業計画

- 第1回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 検査用具に触れ、検査項目との結びつきを知る。概要を視聴（齋藤）
- 第2回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 段階3-2の検査項目とその演習（齋藤）
- 第3回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 段階4-1,4-2の検査項目とその演習。用紙への転記方法（齋藤）
- 第4回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 段階5-1,5-2の検査項目とその演習。記録用紙の構成。（齋藤）
- 第5回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 段階2の検査項目とその演習。（齋藤）
- 第6回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 スライドによる<S-S法>知識の整理。模擬検査（段階3以上）。（齋藤）
- 第7回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 模擬検査（段階2）、サマリーへの転記方法。提出課題の説明（齋藤）
- 第8回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 事例検討、訓練案の作成。必要に応じ教材作成を含む（齋藤）
- 第9回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 事例検討、訓練案の作成。必要に応じ教材作成を含む（齋藤）
- 第10回 「国リハ式<S-S法>言語発達遅滞検査」 模擬訓練（齋藤）
- 第11回 新版K式発達検査2001検査実技（工藤）
- 第12回 新版K式発達検査2001プロフィール作成演習（工藤）
- 第13回 検査所見作成演習（工藤）
- 第14回 検査実施報告書作成演習（工藤）
- 第15回 発達検査演習のフィードバック・補足・まとめ（工藤）

■ 評価方法

- 各担当教員が50%分ずつ評価を行う。
- 齋藤担当分については課題提出物40%、演習参加行動10%で評価する。
- 工藤担当分については実施後の検査用紙、報告書を合わせて50%分の評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・「言語発達障害学」 p.198～ p.216 <S-S 法> の部分を事前に読んでおくこと。（齋藤）
- ・新版 K 式発達検査の演習形式の講義については、言語発達障害Ⅲ（評価法-基礎）の内容と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習は検査を実施する学生と観察室から検査用紙に記載する学生に分けます。実施する学生については、事前に担当教員との相談をして下さい。（工藤）

■ 教科書

書名：新版 K 式発達検査2001実施手引き（言語発達障害Ⅲと共通）

■ 参考図書

書名：新版 K 式発達検査法2001年版 発達のアセスメントと支援

著者名：松下裕，郷間英世

出版社：ナカニシヤ出版

書名：発達相談と新版 K 式発達検査 —— 子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫

著者名：大島剛，川畑隆，伏見真理子 ほか

出版社：明石書店

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	構音障害 I (臨床の基礎)				
担当者	松本治雄			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パターン」のうち、構音の障害はもっとも中核をなす障害要素である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であるとも言える。講義は言語聴覚士が構音指導上、基本として身につけるべき内容を演習的に習得することを目指している。

■ 到達目標

- ・コミュニケーションにおける話し言葉の役割を知る
- ・構音の概念を理解し、正常構音の産生のメカニズムを知る
- ・構音障害の障害パターンを知る
- ・構音障害の種類について理解し、その検査、分析、治療方法を知る

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聴き取りと表記
- 第2回 コミュニケーションに関わる要因と話すためのしくみと働き
- 第3回 日本語音声の成り立ち (母音)
- 第4回 日本語音声の成り立ち (子音①)
- 第5回 日本語音声の成り立ち (子音②)
- 第6回 日本語音声の成り立ち (子音③)
- 第7回 言語障害に関わる要因①
- 第8回 言語障害に関わる要因②
- 第9回 構音障害の検査と評価①
- 第10回 構音障害の検査と評価②
- 第11回 構音障害の検査と評価③
- 第12回 構音指導の方法①
- 第13回 構音指導の方法②
- 第14回 構音指導事例①
- 第15回 構音指導事例②とまとめ

■ 評価方法

小テスト (10%) を期末テスト (90%) に加味して評価する予定

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ①音声の聴き取りと IPA による記述方法の熟達する。
- ②検査方法の熟練と結果の分析方法を実践的に習得する。
- ③構音方法や治療方法は常に自分で試行し実験により体験的に確認すること。
- ④日常的のこれらのことを意識し、身体的に身につけるように心がけること。

■ 教科書

書 名：改訂機能性構音障害
 著者名：本間慎治編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：構音障害のある子どもの理解と支援
著者名：加藤正子・竹下圭子・大伴潔編著
出版社：学苑社

■ 留意事項

体験の欠落をしないため健康に留意して、欠席をしないよう心がける。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）				
担当者	吉田紀子・松本治雄（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

機能性構音障害の指導に必要な基礎知識を学ぶ。
 構音の評価および結果の分析、指導のすすめかたについて演習を中心に学ぶ。

■ 到達目標

- ・ 構音発達の過程と機能性構音障害について理解する。
- ・ 構音を正確に聴き取り記録することができる。
- ・ 構音障害の検査、結果の分析、構音指導を考え、実施することができる。

■ 授業計画

- 第1回 機能性構音障害とは（吉田）
- 第2回 幼児期の構音発達（吉田）
- 第3回 構音の聴き取りと記録（吉田）
- 第4回 機能性構音障害における構音の誤り①（吉田）
- 第5回 機能性構音障害における構音の誤り②（異常構音）（吉田）
- 第6回 構音検査（実習）（吉田）
- 第7回 構音検査（結果の分析）（吉田）
- 第8回 指導プログラムの立案（吉田）
- 第9回 構音別の指導方法（吉田）
- 第10回 ケーススタディー①（吉田）
- 第11回 ケーススタディー②（吉田）
- 第12回 事例紹介（松本）
- 第13回 事例紹介（松本）
- 第14回 事例紹介（松本）
- 第15回 事例紹介（松本）

■ 評価方法

筆記試験90%、提出課題10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後に復習をして、分からない事柄は次回の授業で質問すること。

■ 教科書

書 名：特別支援教育における構音障害のある子どもの理解と支援
 著者名：加藤正子ら 編
 出版社：学苑社

■ 参考図書

書 名：言語聴覚療法シリーズ 改訂機能性構音障害
 著者名：本間慎治
 出版社：建帛社

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	構音障害Ⅲ (器質性)				
担当者	藤原百合			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題点や、チームアプローチについて学ぶ。また、鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練について学ぶ。

■ 到達目標

口蓋裂に伴う異常の評価・診断、指導・訓練に関する知識・技能・態度を身につける

■ 授業計画

- 第1回 正常な発話のプロセス：呼吸、発声、共鳴、構音
- 第2回 器質性構音障害の定義、原因疾患、発症メカニズム、関連障害
- 第3回 口蓋裂言語の特徴（発声、共鳴、構音）
- 第4回 評価：発話の聴覚的印象
- 第5回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第6回 評価：口蓋裂言語検査（ビデオ）
- 第7回 機器を用いた評価：鼻咽腔閉鎖機能、構音機能
- 第8回 器質的異常に対する医学的治療：外科的、歯科補綴的治療
- 第9回 言語治療：機能訓練
- 第10回 言語治療：系統的構音訓練、視覚的フィードバック訓練
- 第11回 口蓋裂に伴う問題：哺乳・離乳、発達、聴力、心理社会的問題
- 第12回 チーム医療、年齢による対応の変化
- 第13回 症例検討（グループ演習）
- 第14回 症例検討（グループ演習）
- 第15回 まとめ、国家試験過去問

■ 評価方法

筆記試験（90%） 演習（10%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を読んで、予習・復習すること。口蓋裂のサンプルCDを用いて、構音障害の聴覚的評価の練習をすること。DVD「目で見える日本語音の産生」「目で見える構音障害」を視聴して、正常な発話と異常な発話の違いを理解すること。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚診断学 発声発語障害学
 著者名：熊倉勇美、小林範子、今井智子 編集
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：DVD 「目で見える日本語音の産生」「目で見える構音障害」
 著者名：藤原百合、山本一郎
 出版社：EPG 研究会

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	構音障害Ⅳ (運動障害性)				
担当者	熊倉勇美	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

運動障害性・器質性構音障害の臨床・関連症状を理解し、評価と訓練の技術を習得する

■ 到達目標

検査結果を分析し、対象者に対して必要なリハサービスを提供できる

■ 授業計画

- 第1回 発話とは何か：言語と発話の違い
- 第2回 運動障害性構音障害とは何か：原因疾患とその症状
- 第3回 発生頻度、他の障害の合併（四肢体幹の運動・感覚障害、摂食嚥下障害など）
- 第4回 評価の方法：発話を聞くポイント、発話評価の物差し
- 第5回 鑑別診断：意識障害、高次脳機能障害（失語を含む）、認知症など
- 第6回 検査法：(AMSD、SLTA-ST など)
- 第7回 共鳴異常の判定：blowing 検査、nasometer 検査など
- 第8回 6分類それぞれの発話特徴と原因疾患
- 第9回 訓練の考え方と方法：さまざまな訓練テクニック、補綴治療など
- 第10回 訓練の効果とエビデンス
- 第11回 頭頸部がんとその治療
- 第12回 器質性構音障害と ST の役割
- 第13回 構音評価の方法：切除法、再建法との関連性
- 第14回 構音訓練の考え方とその方法
- 第15回 補綴治療など、他の専門職との協業

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業ごとに、予習・復習のページを指示するので、確認すること。

■ 教 科 書

書 名：改訂運動障害性構音障害

著者名：熊倉勇美編著

出版社：建帛社

書 名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション：構音障害、摂食嚥下障害

著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美 編著

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

疑問や確認したいことがあれば積極的に質問すること。遅刻に注意して下さい。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	嚙下障害 I (基礎と評価)				
担当者	中村靖子			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

正常嚙下のメカニズムや嚙下障害の検査・評価等基本的な事項について学ぶ

■ 到達目標

嚙下障害の基礎的な知識を理解する

■ 授業計画

- 第1回 嚙下障害とは
- 第2回 解剖と神経 (1)
- 第3回 解剖と神経 (2)
- 第4回 生理と神経機構 (1)
- 第5回 生理と神経機構 (2)
- 第6回 年齢的变化
- 第7回 原因と病態 (1)
- 第8回 原因と病態 (2)
- 第9回 原因と病態 (3)
- 第10回 情報収集及び摂食観察
- 第11回 検査及び評価 (1)
- 第12回 検査及び評価 (2)
- 第13回 検査及び評価 (3)
- 第14回 検査及び評価 (4)
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験100%

筆記試験 (100点満点) と実技試験 (100点満点)。どちらも60点以上で合格。両試験に合格すること。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

復習を必ず行なうこと。

実技練習は学生同士ペアとなり練習を行なうこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚙下障害学

著者名：倉智雅子

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：摂食嚙下リハビリテーション 第3版

著者名：監修 才藤栄一 植田耕一郎

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）				
担当者	戸倉晶子・田上恵美子（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える。（田上）

嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う。（戸倉）

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。（田上）

VF・VEの評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。（戸倉）

■ 授業計画

- 第1回 嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上）
- 第2回 評価から訓練へ、間接訓練（呼吸・咳嗽など）演習（田上）
- 第3回 間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上）
- 第4回 間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上）
- 第5回 直接訓練（頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など）（田上）
- 第6回 直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上）
- 第7回 姿勢調整・介助法（田上）
- 第8回 経口移行の目安、段階的摂食訓練（田上）
- 第9回 嚥下造影検査の目的・手順について（戸倉）
- 第10回 嚥下造影検査の解析①（戸倉）
- 第11回 嚥下造影検査の解析②（戸倉）
- 第12回 症例検討①（戸倉）
- 第13回 症例検討②（戸倉）
- 第14回 嚥下内視鏡検査による評価①（戸倉）
- 第15回 嚥下内視鏡検査による評価②（戸倉）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習を行うこと。また、空き時間を利用して実技の練習も積極的に行い、知識と技術の習得に努めること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学

著者名：倉智雅子

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書名：脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

書名：目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として

著書名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑤⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	吃音				
担当者	土屋美智子			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

吃音の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する。

■ 到達目標

吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としての援助のあり方を理解する。
「吃音とは何か」を理解し、情報収集（検査含む）、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技能を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 【吃音の基本的知識】
- 第2回 【吃音症状】 吃音中核症状とその他の非流暢性などについて
【進展段階】 吃音の進展段階について理解する
- 第3回 【吃音児・者のおかれている現状】 吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としてどのように援助すべきかを考える
- 第4回 【吃音臨床①】 吃音臨床における情報収集について
- 第5回 【吃音臨床②】 吃音検査法
- 第6回 【吃音臨床③】 吃音の総合評価について（症例検討）
- 第7回 【吃音臨床④】 吃音の指導・訓練法①
- 第8回 【吃音臨床⑤】 吃音の指導・訓練法②

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に教科書P 2～5「ある吃音者の体験談」を読んでおいて下さい

■ 教科書

書 名：改訂吃音
著者名：都筑澄夫編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	聴覚障害 I (概論)				
担当者	矢吹裕栄・山口忍 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を理解し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。(矢吹)
- ・聴覚障害来す疾患と検査、聞こえの実際と対応、補聴機器の仕組みと適応について学習する (山口)

■ 到達目標

- ・聞こえの仕組みの基礎知識を習得する。難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。(矢吹)
- ・聴覚障害への理解を深め、適切な対応と補聴機器について、説明できるようになる。(山口)

■ 授業計画

- 第1回 基礎用語の確認
音とは何か、「きこえる」と言うこと。(矢吹)
- 第2回 聴覚器の解剖
外耳・中耳の解剖と機能 (矢吹)
- 第3回 聴覚器の解剖
内耳の解剖・機能 (矢吹)
- 第4回 前半のまとめと復習 (矢吹)
- 第5回 聴覚障害とは何か (矢吹)
- 第6回 難聴の分類 (矢吹)
- 第7回 聴覚検査法 1 (矢吹)
- 第8回 聴覚検査法 2 (矢吹)
- 第9回 聴覚障害の実態 (山口)
- 第10回 聴覚障害をきたす疾患 (山口)
- 第11回 聴覚障害への対応 (山口)
- 第12回 補聴器の仕組みと適応 (山口)
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応 (山口)
- 第14回 聴力検査の復習と結果の見方 (山口)
- 第15回 まとめ (山口)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

学習内容が多くなるため、日々の復習が欠かせません。基本的事項の理解の積み重ねが重要な分野であり、基礎が疎かになるとその先の理解が難しくなります。その日のうちにその日の学習内容を復習する事が望ましいです。(矢吹)

聴覚器の解剖と働きについて、復習すること。聴覚路の図を、毎日見て暗記すること。聴覚検査名と目的、障害を来す疾患名を覚えること。補聴機器の種類と仕組みについて、説明できるようにしておくこと。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。(山口)

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）				
担当者	福田章一郎・矢吹裕栄・田村薫・野田祥子・山口忍（オムニバス）	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害が言語、心理および社会性の発達にどのような影響を与えるかを具体的な教材などを通して紹介し、聴覚障害児・者の発達および社会生活上の困難さの理解を促す。（福田）
- ・前期の学習内容を整理し、基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理とマスキングに関する基礎を学習する。（矢吹）
- ・聴覚の検査法とその評価について、実際に検査機器を使用しながら学ぶ。聴覚障害児の聴覚発達を中心とした援助について講義を行う。（田村、野田、山口）

■ 到達目標

- ・難聴発見から介入に必要な聴覚評価、digitalHA および人工内耳などの補聴、保護者のカウンセリングとそれらに必要な療育法およびコミュニケーション手段について具体的に解説する。（福田）
- ・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。また、マスキングの考え方を基本的な数的処理とグラフを利用して習得する。（矢吹）
- ・聴覚障害を有する対象者に基本的な検査が実施でき、その結果を評価するとともに、発達を含めた援助を提案できるようになる。（田村、野田、山口）

■ 授業計画

- 第1回 聴覚障害の理解に必要な基礎的に知識について解説する（福田）
- 第2回 スクリーニングから精密検査までに必要とされる諸検査とその評価法について解説する（福田）
- 第3回 難聴の原因について遺伝をふくめ解説する（福田）
- 第4回 聴覚の発達および幼児聴力検査法を映像を通し具体的に解説する（福田）
- 第5回 聴覚障害児の補聴に必要な知識と fitting 法および人工内耳の適応とそのメカニズムについて解説する（福田）
- 第6回 聴覚障害児のコミュニケーション法と療育法の目標と評価を解説する（福田）
- 第7回 聴覚障害の原因疾患（矢吹）
- 第8回 聴覚器・疾患・検査結果の関連（矢吹）
- 第9回 人工内耳の仕組み1（矢吹）
- 第10回 人工内耳の仕組み2（矢吹）
- 第11回 マスキングとは（矢吹）
- 第12回 マスキングの考え方（矢吹）
- 第13回 マスキングの考え方2（矢吹）
- 第14回 標準聴力検査について（野田または田村）
- 第15回 標準聴力検査の検査演習（野田または田村）
- 第16回 Bekesy 検査について（野田または田村）
- 第17回 Bekesy 検査の演習（野田または田村）
- 第18回 閾値上聴覚検査について（野田または田村）
- 第19回 閾値上聴覚検査の演習（野田または田村）
- 第20回 聴性脳幹反応の測定方法（野田または田村）
- 第21回 聴性脳幹反応の検査演習（野田または田村）
- 第22回 インピーダンスオージオメータについて（野田または田村）
- 第23回 語音聴力検査について（野田または田村）
- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示①（山口）
- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査の目的とその意義について 症例提示②（山口）
- 第26回 幼小児の聴力検査（山口）

- 第27回 幼小児の聴力検査（山口）
第28回 臨床の実際－発達遅滞例の聴力評価－（山口）
第29回 臨床の実際－補聴機器フィッティングの考え方－（山口）
第30回 まとめ（山口）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・前期の聴覚障害Ⅰの内容を踏まえて授業が進みます。聴覚障害Ⅰの理解に不安がある場合は復習をしておく必要があります。（矢吹）
- ・聴覚障害児・者の困難について、復習すること。純音聴力検査、語音聴力検査・閾値上検査はST室の検査機器を用いて、互いに測定し合い手順を覚えること。インピーダンスオージオメトリーは、プローブ装着が可能になるよう練習すること。乳幼児の聴力検査の種類と内容、適応年齢について覚えること。補聴器のフィッティングの原則について説明できるようになること。講義中に質問し、口頭で応答を求めます。（山口）

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著書名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑤⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	臨床実習 I				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子・塩見千夏 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

I 期臨床実習（見学実習）
設定期間：1 週間

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
毎日実習日誌を作成し、提出する。
SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
「実習のふり返し」を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表準備の状況
 - ⑧ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①②③④⑥

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子・塩見千夏 (オムニバス)			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習）
設定期間：5週間

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、指導を受けながら言語聴覚療法における検査及び評価が出来るようになる。また、指導援助プログラムの立案について考えることが出来る。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査等を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。

「実習のふり返し」を作成する。

症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
- ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
- ③ SV からの種々の情報
- ④ SV 記載の成績表・所見
- ⑤ 症例報告書
- ⑥ 実習日誌
- ⑦ 出席状況
- ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ⑨ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①②③④⑥

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）				
担当者	板倉登志子・山本永人・吉機俊雄・松井理直・木村晃大（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第2回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第3回 専門基礎分野 音響学（松井）
- 第4回 専門基礎分野 音響学（松井）
- 第5回 専門基礎分野 音声学（松井）
- 第6回 専門基礎分野 音声学（松井）
- 第7回 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第8回 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第9回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第10回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第11回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第12回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第13回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）

■ 評価方法

試験100%（国家試験と同形式の試験を2回実施、問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に分からないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士テキスト
 著者名：廣瀬肇 監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③⑤
 DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	内科学（老年医学含む）				
担当者	宮井 潔			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復習してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 到達目標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授業計画

- 第1回 内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
診断学・検査学
- 第2回 内科学総論－治療医学、予防医学
- 第3回 内科学総論－血液疾患
- 第4回 内科学総論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
- 第5回 内科学総論－膠原病・アレルギー・免疫疾患
小テスト及び解説
- 第6回 内科学総論－感染症
- 第7回 内科学総論－内分泌疾患
- 第8回 内科学総論－代謝疾患
- 第9回 内科学総論－循環器疾患
- 第10回 内科学総論－呼吸器疾患
- 第11回 内科学総論－胃・泌尿器疾患
- 第12回 内科学総論－消化器疾患
- 第13回 内科学総論－肝・胆・膵疾患
- 第14回 内科学総論－中毒・環境要因による疾患
- 第15回 老年医学

■ 評価方法

筆記試験95% 筆記小テスト5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の始めに見本をお見せしますが、セミリーフを用い”マイキーワードノート”を作製して、各教科で習ったキーワードをまとめることをおすすめします。

■ 教科書

書 名：標準理学療法・作業療法専門分野 内科学
著者名：前田真治・上月正博・飯山準一
出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：新臨床内科学

著者名：高久史磨・尾形悦郎

出版社：医学書院

書名：標準理学療法・作業療法専門分野 老年医学

著者名：大内尉義

出版社：医学書院

書名：NEW 臨床検査診断学

著者名：宮井 潔

出版社：南江堂

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤

DPとCPの関係はポリシーを参照してください。

授業科目	小児科学				
担当者	田平公子			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

小児の成長・発達、形態的特徴・生理的特徴、よくみられる疾患、見逃せない疾患を中心とした小児の病気及び予防接種・母子保健について述べる。

■ 到達目標

小児の成長・発達、生理・病理上の特徴の把握、小児疾病、小児保健等を理解すること

■ 授業計画

- 第1回 小児の発育・発達、小児の生理的特徴
- 第2回 出生前小児科学
- 第3回 新生児 周産期学
- 第4回 乳幼児の栄養と生活
- 第5回 母子保健 予防接種
- 第6回 小児の感染症
- 第7回 中枢性疾患、痙攣、てんかん、変性疾患
- 第8回 中枢性疾患と運動器、脳性麻痺、ジストロフィー
- 第9回 小児科学 循環、呼吸
- 第10回 小児科学 消火器、内分泌
- 第11回 小児科学 アレルギー、免疫
- 第12回 小児科学 血液、腎、筋
- 第13回 発達障害
- 第14回 小児の事故、小児診療の特徴
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記100%（小テスト20%本テスト80%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を必ず熟読すること。

■ 教科書

書 名：最新育児小児病学
 著者名：黒田恭弘
 出版社：南江堂

書 名：小児・思春期診療 最新マニュアル
 著者名：五十嵐 隆
 出版社：日本医師会

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	形成外科学				
担当者	大倉正也			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な顎顔面形成外科学

■ 到達目標

基礎知識と臨床知識の習得と理解

■ 授業計画

- 第1回 総論(嚙下を含む)
- 第2回 口唇口蓋裂
- 第3回 口腔腫瘍
- 第4回 顎変形症
- 第5回 顎顔面の再建
- 第6回 唾液腺の機能と唾液腺疾患
- 第7回 試験対策
- 第8回 試験対策

■ 評価方法

筆記試験 (80%) 受講態度 (20%)

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

嚙下についてまず理解すること。試験対策では、具体的に問題を解いていきます。授業中に理解し、覚えていきながら、試験に慣れるようについてきて下さい。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）				
担当者	本多知行・楯谷一郎（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）
 音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（楯谷）

■ 到達目標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）
 音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。（楯谷）

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
- 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練1（本多）
- 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練2（本多）
- 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
- 第5回 偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ（本多）
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
- 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
- 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
- 第8回 喉頭の解剖（楯谷）
- 第9回 発声の生理機構（楯谷）
- 第10回 喉頭検査法（楯谷）
- 第11回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第12回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第13回 喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変（楯谷）
- 第14回 音響分析・音声検査法（楯谷）
- 第15回 まとめ（楯谷）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

受講後は、その都度レジメやノート搭を読み返し、必ず復習をしておくこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための音声障害学
 著者名：大森孝一
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版

著者名：金子芳洋 千野直一監修

出版社：医歯薬出版

書名：「嚥下障害の臨床」第2版

著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑤

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）				
担当者	金丸眞一			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学
 著者名：喜多村健 編著
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤
 DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	音声学				
担当者	松井理直			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の構音と音響特性について正確な知識を習得する

■ 到達目標

発音記号・音節とモーラ・アクセントとイントネーション・音声の音響特性について習熟する

■ 授業計画

音声と言語現象について理解を深める

- 第1回 音声器官の復習
- 第2回 IPA 発音記号と構音障害の発音記号について
- 第3回 舌の特性
- 第4回 調音方法の分類
- 第5回 子音の詳細 (1)
- 第6回 子音の詳細 (2)
- 第7回 母音について
- 第8回 二重調音と二次的調音
- 第9回 各種音声変異について
- 第10回 日本語の分節音 (1)
- 第11回 日本語の分節音 (2)
- 第12回 日本語の分節音 (3)
- 第13回 母音無声化について
- 第14回 日本語のモーラと音節
- 第15回 重音節の意味
- 第16回 アクセントとイントネーション
- 第17回 東京方言名詞アクセントの特徴
- 第18回 動詞・形容詞のアクセント
- 第19回 イントネーションの詳細
- 第20回 リズム・ポーズ・話速
- 第21回 プロミネンスとインテンシティ
- 第22回 音韻論：音素の考え方
- 第23回 相補分布と最小対立
- 第24回 弁別素性と音韻理論の基本
- 第25回 音声と形態現象
- 第26回 動詞を巡る形態現象
- 第27回 ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティ
- 第28回 母音の音響特性に関する復習
- 第29回 子音の音響特性に関する復習
- 第30回 アクセントと基本周波数

■ 評価方法

授業中のミニテスト 20%、本テスト 80%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書名：日本語音声学入門（1年次に使った本なので新たに購入の必要はない）

著者名：斎藤純男

出版社：三省堂

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③⑤⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	社会保障制度				
担当者	山本永人			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会福祉と社会保障制度の概略を俯瞰する。

■ 到達目標

言語聴覚士に求められる基本的な社会福祉および社会保障制度の知識を習得する。

■ 授業計画

- 第1回 社会福祉の定義とその専門性について
- 第2回 わが国の障害者福祉の理念
- 第3回 ICF とソーシャルインクルージョン
- 第4回 わが国の社会福祉の歴史
- 第5回 社会保障の基本的な枠組み
- 第6回 社会保険制度 (1) 医療保険
- 第7回 社会保険制度 (2) 年金保険
- 第8回 社会保険制度 (3) 労働保険
- 第9回 社会保険制度 (4) 介護保険①
- 第10回 社会保険制度 (4) 介護保険②
- 第11回 公的扶助制度と社会手当
- 第12回 障害者の福祉サービスについて
- 第13回 障害者総合支援制度の概略
- 第14回 児童の福祉
- 第15回 社会福祉援助技術について

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業においては、教科書の該当部分を熟読しておくこと。(30分) また、授業終了後には授業で配布したプリントの赤字で記入した部分を中心に振り返りを行うこと。(30分) 本授業は言語聴覚士の国家試験対策としても対応できるように組み立てているので、積極的に授業に参加してください。

■ 教 科 書

書 名：よくわかる社会福祉 第11版
 著者名：山縣文治・岡田忠克篇
 出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考図書

書 名：はじめての社会保障
 著者名：椋野美智子・田中耕太郎
 出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	医療福祉教育・関係法規				
担当者	山本永人・藤井達也・吉見剛二（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会福祉と社会保障制度に関連する法規の概要を説明する。（山本）
 聴覚障害者の願いやニーズに寄り添う支援を！ - 専門施設での実践を通して学ぶ - （吉見）
 言語聴覚士に関する法規、言語聴覚士法の成り立ちに関する講義を行う。（藤井）

■ 到達目標

- ・ 言語聴覚士に求められる基本的な社会福祉および社会保障制度の知識を習得する。
- ・ 願いに寄り添う支援とは何か？ そのための支援者としての退所者の理解と支援時の配慮やあるべき姿勢を学ぶ。機能訓練中心主義ではなく「生き甲斐と暮らし・人生を支えること」の大切さを知る。（吉見）

■ 授業計画

- 第1回 生活保護制度に関する関係法規（山本）
 第2回 児童福祉に関する関係法規（山本）
 第3回 障害者福祉に関する関係法規（山本）
 第4回 言語聴覚士法・社会福祉法および成年後見制度について（山本）
 第5回 大阪での聴覚障害者専門の施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践報告。多様な支援・実践を通して、対象者が成長・発達していく姿を紹介。手話を用いた講義①（吉見）
 第6回 大阪での聴覚障害者専門の施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践報告。多様な支援・実践を通して、対象者が成長・発達していく姿を紹介。手話を用いた講義②（吉見）
 第7回 言語聴覚士法の歴史（藤井）
 第8回 職能組織について（藤井）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業においては、教科書の該当部分を熟読しておくこと。（30分）また、授業終了後には授業で配布したプリントの赤文字で記入した部分を中心に振り返りを行うこと。（30分）本授業は言語聴覚士の国家試験対策としても対応できるように組み立てているので、積極的に授業に参加してください。

■ 教 科 書

書 名：よくわかる社会福祉 第11版
 著者名：山縣文治・岡田忠克篇
 出版社：ミネルヴァ書房

■ 参考図書

書 名：はじめての社会保障
 著者名：椋野美智子・田中耕太郎
 出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語聴覚障害特論				
担当者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子・五味田裕・竹森けいこ・ST 教員 他 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリア検査の評価データから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。(講師非公表)
- ②口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。(山本)
- ③言語聴覚領域を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。(名徳・五味田)
- ④虐待問題について講義を行う。(江頭)
- ⑤摂食・嚥下リハビリテーションを行う上で、器質的口腔ケアによる口腔内保清は必須である。今授業では、口腔内アセスメント方法から、具体的な器質的口腔ケア方法について学ぶ。(竹森)
- ⑥国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。(ST 教員)

■ 到達目標

- ①ディサースリア検査の評価データからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。(講師非公表)
- ②発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。(山本)
- ③薬物治療で言語聴覚領域に影響する薬について把握する。(名徳・五味田)
- ④虐待について理解を深める。(江頭)
- ⑤口腔内アセスメントが出来るようになる。器質的口腔ケアが出来るようになる。(竹森)
- ⑥国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。(ST 教員)

■ 授業計画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について (講師非公表)
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第3回 発声機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第6回 発話速度の調節法1 (講師非公表)
- 第7回 発話速度の調節法と構音訓練など (講師非公表)
- 第8回 まとめ (講師非公表)
- 第9回 顔面・口腔の発生 口腔機能の発達 (山本)
- 第10回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法 (山本)
- 第11回 唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー (EPG) を用いた異常構音の分析と治療について (山本)
- 第12回 薬の基礎知識①用法・用量など (名徳)
- 第13回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など (名徳)
- 第14回 薬の薬理作用 (摂食・嚥下に影響する薬剤) (名徳)
- 第15回 輸液の基礎と栄養 (名徳)
- 第16回 薬物治療の基礎 (用法・用量・副作用・相互作用、患者ケア 等) (五味田)
- 第17回 言語聴覚領域 (特に聴覚・嗅覚、摂食・嚥下機能等) に影響する薬
言語聴覚機能に影響する薬についての Q & A (五味田)
- 第18回 子供の虐待 歴史、制度の変遷、虐待の種類 (江頭)
- 第19回 虐待に関わる発達の課題 (被虐待児の心理的特徴等) (江頭)
- 第20回 虐待を取り巻く社会的背景 (江頭)

第21回	虐待に対する対応	被虐待児の支援について（江頭）
第22回	口腔ケアの基礎知識	講義（竹森）
第23回	口腔ケアの実技演習	（竹森）
第24回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	1
第25回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	2
第26回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	3
第27回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	4
第28回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	5
第29回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	6
第30回	言語聴覚士のための基礎知識	～国家試験対策～（ST 教員）
	領域別問題の実践	7

■ 評価方法

試験100%の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ 授業後に配布資料とテキストのそれぞれの治療アプローチ、訓練手技についての箇所を読み直して講義内容の復習を行うこと。
- ・ 事前に指定テキストの基礎編（前半）に目を通しておくことを推奨する。

■ 教科書

書名：標準ディサースリアテキスト
 著者名：西尾正輝
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）				
担当者	大根茂夫・中村靖子・大西環（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。
- ②失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
 検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
 問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
 訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
 評価報告書を作成し発表できる。

■ 授業計画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	失語症者に検査を実施する
第3回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック1
第4回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック2
第5回	臨床講義2回目	セッションの準備
第6回	臨床講義2回目	失語症者に検査を実施する
第7回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック1
第8回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック2
第9回	臨床講義3回目	セッションの準備
第10回	臨床講義3回目	失語症者に検査を実施する
第11回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック1
第12回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック2
第13回	臨床講義4回目	セッションの準備
第14回	臨床講義4回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第15回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック1
第16回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック2
第17回	臨床講義5回目	セッションの準備
第18回	臨床講義5回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第19回	臨床講義5回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック1

第20回 臨床講義5回目 グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成
グループによる発表とフィードバック2

■ 評価方法

症例レポート40% 筆記試験60% 両得点の合計で合否を決める。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。

本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教科書

書名：失語症 Q & A 検査結果のみかたとりハビリテーション

著者名：種村 純

出版社：新興医学出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑥⑦

DPとCPの関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害検査で得られた評価情報を基に、障害機序に基づいて論理的に考察する能力を修得する。また、障害機序に沿った治療プログラムの立案について学ぶ。

■ 到達目標

1. 検査結果と生活情報から、高次脳機能障害の障害機序を論理的に考察することができる。
2. 障害機序に基づき、リハビリテーションプログラムを立案することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害のリハビリテーション（森岡）
- 第2回 記憶障害の評価とリハビリテーション（森岡）
- 第3回 失認の評価とリハビリテーション（森岡）
- 第4回 半側空間無視の評価とリハビリテーション（中谷）
- 第5回 遂行機能の評価（BADS）（圓越）
- 第6回 遂行機能の評価（BADS）（圓越）
- 第7回 遂行機能の評価とリハビリテーション（中谷）
- 第8回 認知症の病型初期症状と関わり方（森岡）

■ 評価方法

定期試験80%、平常点（レポート、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第2版

著者名：石合純夫

出版社：医歯薬出版株式会社

書 名：高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版

著者名：原 寛美

出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	言語発達障害Ⅴ (援助法 - 各論)				
担当者	工藤芳幸・ネグロンちひろ・中山清司 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語コミュニケーション発達支援のための介入技法について学ぶ。工藤 (第1回～第5回) は発達の遅れやアンバランスのある子どもや読み書きに難しさのある子どもの発達特性や障害メカニズム、スクリーニングや総合的なアセスメント、個別指導・支援・介入について講義する。ネグロン (第6回～第11回) は障害を持っている方々を支援するために必要な応用行動分析の知識の説明と現在使われているコミュニケーション支援の紹介をする。中山 (第12回～第15回) はTEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージやコミュニケーション支援、地域生活支援などを講義する。

■ 到達目標

発達の観点からみた障害の知識、アセスメント、介入技法を理解する。

■ 授業計画

- 第1回 発達支援が必要な子どもたちの発達・認知・行動特性 (工藤)
- 第2回 個別指導場面を想定したインテークからのアセスメント・支援・相談プロセス (工藤)
- 第3回 課題優先型指導・交渉優先型指導・機会活用型 (工藤)
- 第4回 読み障害の評価と指導・支援 - 二重乖離モデル・RTI モデル (工藤)
- 第5回 養育者のサポートと支援プログラム (工藤)
- 第6回 応用行動分析の概念の復習 (ネグロン)
- 第7回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法 (ネグロン)
- 第8回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法 (ネグロン)
- 第9回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法 (ネグロン)
- 第10回 PECS とは (ネグロン)
- 第11回 PECS とは (ネグロン)
- 第12回 自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本 (中山)
- 第13回 自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討 (中山)
- 第14回 自閉症のコミュニケーションプログラムの開発 (中山)
- 第15回 自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討 (中山)

■ 評価方法

筆記試験100% : 工藤担当70% (中山担当範囲含む)、ネグロン担当30%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ・言語発達障害学のテキストにある、指導法、応用行動分析、TEACCH の項目は一読を薦める。
- ・指定教科書「自閉症支援のスタンダード Ver.2 ～余暇支援の展開～」に目を通しておくこと。
- ・参考書指定している書籍にも事前に目を通しておくことが望ましい。
- ・1年次の言語発達障害Ⅱの資料も復習に役立つ。

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版

著者名：玉井ふみ・深浦順一 編

出版社：医学書院

書 名：自閉症支援のスタンダード Ver.2 ～余暇支援の展開～

著者名：中山清司ほか

出版社：自閉症 e サービス

■ 参考図書

書名：絵カード交換式コミュニケーション・システム トレーニング・マニュアル 第2版

著者名：ロリ・フロスト(著), アンディ・ボンディ(著)

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

書名：自閉症を持つ生徒のためのピラミッド教育アプローチ 特別支援に使える行動分析学ガイド

著者名：Ph.D. & ベス・サルザ-アザロフ, Ph.D. アンディ・ボンディ(著)

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

■ 留意事項

工藤担当分：講義進捗状況により補講（2～3コマ程度までを予定）。

■ ポリシー該当項目

ST：CP①③④⑥⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください。

授業科目	言語発達障害Ⅵ (援助法一応用)				
担当者	松下眞一郎 他 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ AAC の実際について学ぶ。
- ・ 脳性麻痺児の言語障害の特徴やコミュニケーションの問題点を学習する。また、ボバース概念による言語治療の考え方を学び、評価の仕方を学ぶ。その上で摂食指導を行っていく上での基本の実技を学習する。
- ・ 言語発達及び言語発達障害の先行研究をもとに、言語の獲得プロセスを推測し、言語発達障害の特徴を理解する。また、その特徴からみられる臨床像を解説していく。

■ 到達目標

1. AAC の適用について判断できる。
2. 脳性麻痺児の言語障害やコミュニケーションの問題、食事の問題点を知る。そして、それに対する援助方法を知り、理解する。
3. 脳性麻痺児に実際に指導を行っていく際の食べさせ方、飲ませ方、咀嚼を促す方法などを習得する。
4. これまでの言語発達に関する授業内容や、先行研究から言語発達障害の特徴を仮説立てる経験をする。

■ 授業計画

- 第1回 マカトンサイン, サウンズ&シンボolz AAC 概論 (講師非公表)
- 第2回 マカトンサイン, サウンズ&シンボolz 理論 (講師非公表)
- 第3回 マカトンサイン, サウンズ&シンボolz 演習 (講師非公表)
- 第4回 マカトンサイン, サウンズ&シンボolz 当事者に来ていただき演習 (講師非公表)
- 第5回 マカトンサイン, サウンズ&シンボolz 当事者に来ていただき演習 (講師非公表)
- 第6回 日本版 PIC シンボルの概要、指導方法 (講師非公表)
- 第7回 シンボルを使ったコミュニケーション指導の事例 (講師非公表)
- 第8回 脳性麻痺児の言語障害概論 (口腔機能の正常発達も含めて) (講師非公表)
- 第9回 脳性麻痺児のコミュニケーションの問題と援助 (講師非公表)
- 第10回 ボバース概念による言語治療・評価 (講師非公表)
- 第11回 摂食指導について (実技練習) (講師非公表)
- 第12回 視線や表情を中心としたコミュニケーションの発達に関する先行研究や臨床像の紹介 (松下)
- 第13回 視線や表情を中心としたコミュニケーション障害の特徴を仮説立てる (松下)
- 第14回 音韻獲得や身体表象の発達における先行研究や臨床像の紹介 (松下)
- 第15回 音韻獲得や身体表象の発達の問題や特徴を仮説立てる (松下)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ・ AAC に関する書籍に目を通しておくこと
- ・ 脳性麻痺児・者に対する関わりについて知識を整理しておくこと
- ・ コミュニケーション・言語に関する書籍に目を通しておくこと

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑥⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	言語発達障害Ⅶ (援助法-臨床)				
担当者	齋藤典昭	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもさんに協力していただき、一緒に遊び、その後で「子どもさんの課題」と関わる「学生の課題」について検討します。

■ 到達目標

1. 子どもの多様性に気づくことができる
2. 子どもに合わせて上手に遊ぶことができる
3. 遊びを通じて子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

第1回	設定第1回	ガイダンスとセッションプログラムの確認
第2回	設定第1回	子どもさんとのセッション
第3回	設定第1回	セッションのフィードバックとディスカッション
第4回	設定第2回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認
第5回	設定第2回	子どもさんとのセッション
第6回	設定第2回	セッションのフィードバックとディスカッション
第7回	設定第3回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認
第8回	設定第3回	子どもさんとのセッション
第9回	設定第3回	セッションのフィードバックとディスカッション
第10回	設定第4回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認
第11回	設定第4回	子どもさんとのセッション
第12回	設定第4回	セッションのフィードバックとディスカッション
第13回	設定第5回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認
第14回	設定第5回	子どもさんとのセッション
第15回	設定第5回	セッションのフィードバックとディスカッション
第16回	設定第6回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認
第17回	設定第6回	子どもさんとのセッション
第18回	設定第6回	セッションのフィードバックとディスカッション

■ 評価方法

提出レポート90%で評価
準備への参加5%、当日の参加5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後、次回授業までに課題についてグループディスカッションを行い、レポートを作成・提出すること。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑥⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください。

授業科目	音声障害				
担当者	宮田恵里・大西環（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
2. 音声障害の診断と評価方法を学ぶ
3. 音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
4. 音声外科と薬物療法について学ぶ
5. 気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ

■ 到達目標

喉頭の解剖および呼吸と発声について理解する。

患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行い、適切な評価方法および治療法の選択、音声治療のアプローチ方法を考察出来るようになる。

■ 授業計画

- 第1回 声の特性、喉頭の解剖（宮田）
- 第2回 呼吸と発声の仕組み（宮田）
- 第3回 音声障害の診断と評価1（宮田）
- 第4回 音声障害の診断と評価2（宮田）
- 第5回 音声障害疾患の分類1（宮田）
- 第6回 音声障害疾患の分類2（宮田）
- 第7回 音声治療の実際（宮田）
- 第8回 音声治療-間接訓練-（宮田）
- 第9回 音声治療-直接訓練-症状対処的音声治療1（宮田）
- 第10回 音声治療-直接訓練-症状対処的音声治療2（宮田）
- 第11回 音声治療-包括的音声治療-（宮田）
- 第12回 音声外科と薬物療法（宮田）
- 第13回 気管切開患者への対応、無喉頭音声（宮田）
- 第14回 病態から考える音声治療（宮田）
- 第15回 食道発声教室の見学（大西）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎講義後にテキストや配布資料を用いて復習を行うこと

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ14 改定 音声障害
 著者名：荻安誠 / 城本修 編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：STのための音声障害診療マニュアル

著者名：廣瀬肇 監修

出版社：インテル名出版

書名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第2版

著者名：シリーズ監修：藤田郁代、編集：熊倉勇美 / 今井智子

出版社：医学書院

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑥⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例と臨床）				
担当者	田上恵美子・糸田昌隆・大根茂夫（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法、周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

- 第1回 変性疾患の嚥下障害学概論（田上）
- 第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上）
- 第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上）
- 第7回 脳血管障害の嚥下障害（1）（大根）
- 第8回 脳血管障害の嚥下障害（2）（大根）
- 第9回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅰ（医療環境と制度を含む）（糸田）
- 第10回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅱ（糸田）
- 第11回 咀嚼・嚥下機能の神経・生理（糸田）
- 第12回 摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田）
- 第13回 摂食・嚥下障害への具体的対応法Ⅱ（糸田）
- 第14回 摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理（糸田）
- 第15回 グループワーク：医療倫理（糸田）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教科書

書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑤⑥

DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	嚥下障害Ⅳ (チームアプローチ)				
担当者	林直子・大塚佳代子・岡田和子・竹森けいこ・森田婦美子 ・大根茂夫 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。
 気管切開患者の嚥下・発声発語障害の訓練法 (大塚)
 チームアプローチを行うにあたり、他職種の業務内容を知り、連携内容について学ぶ (竹森)

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身に付け、手技を実践できるようになる。
 気管切開患者の嚥下障害と発声発語障害について理解し、訓練方法を学ぶ。(大塚)
 歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて知識を得る。(竹森)

■ 授業計画

- 第1回 栄養管理について (岡田)
- 第2回 嚥下について (岡田)
- 第3回 NSTについて (岡田)
- 第4回 カニューレの構造・役割・種類と取扱いについて (大根)
- 第5回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語器官障害 (大塚)
- 第6回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語訓練 (大塚)
- 第7回 摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースがSTに期待すること① (林)
- 第8回 摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースがSTに期待すること② (林)
- 第9回 歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて (講義) (竹森)
- 第10回 歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて (実技) (竹森)
- 第11回 吸引の技術と目的根拠の理解 (森田)
- 第12回 吸引の手順の理解 (森田)
- 第13回 吸引の演習① (森田)
- 第14回 吸引の演習② (森田)
- 第15回 総まとめ (大根)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

適宜授業中に指示する。

■ 教科書

書 名：発声発語障害学
 著者名：藤田郁代
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①③④⑥⑦

DP と CP の関係は、ポリシーを参照してください。

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）				
担当者	田中美郷・大森千代美・中井弘征・山口忍（オムニバス）	国家出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	2単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ 1. 聴覚及びその障害についての理解。
- ・ 2. 聴覚障害児対策の過去と現在 1) 早期検出・診断・療育 2) 言語指導法（田中）
- ・ 難聴乳幼児の発見とことばを育てる関わり方について学ぶ。（大森）
- ・ 聴覚障害教育における指導・支援の実際（中井）
- ・ 聴覚障害の臨床の目的と実際について学ぶ。（山口）

■ 到達目標

- ・ 最近の新生児聴覚スクリーニングとその後の対策。人工内耳について、特に子どもの場合のSTの役割（田中）
- ・ 難聴乳幼児のことばを育てるための関わりの技法や実際の療育の様子を知る。（大森）
- ・ 個々の実態に合わせたコミュニケーション方法や指導・支援のあり方を学ぶ。（中井）
- ・ 聴覚障害児・者の適切な援助について、検査結果をふまえた適切な援助について立案できるようになる。（山口）

■ 授業計画

- 第1回聴覚障害者（児）をどう診るか（田中）
- 第2回人間における聴覚：その解剖生理学・病理と聴覚心理学（田中）
- 第3回脳における聴覚の情報処理機構（田中）
- 第4回聴覚の発達（聴能について）（田中）
- 第5回聴覚障害児の早期検出、検査・診断・対策のシステム（田中）
- 第6回聴覚障害児の言語の問題と言語指導法（田中）
- 第7回聴覚障害児教育の歴史（田中）
- 第8回聴覚障害者と一般社会（田中）
- 第9回私の50年余りにわたる実践（ライフワーク）の成果（田中）
- 第10回今後に残された課題（田中）
- 第11回難聴児の発見（大森）
- 第12回難聴児のことばを育てる関わり（大森）
- 第13回難聴児療育の実際Ⅰ（大森）
- 第14回難聴児療育の実際Ⅱ（大森）
- 第15回聴覚障害教育を理解するための歴史的経過（中井）
- 第16回聴覚障害教育の実際Ⅰ（聴力の把握と補聴器適合、聴覚学習）（中井）
- 第17回聴覚障害教育の実際Ⅱ（言語指導・自立活動、進路）（中井）
- 第18回聴覚障害の心理的援助Ⅰ（山口）
- 第19回聴覚障害の心理的援助Ⅱ（山口）
- 第20回聴覚障害の遺伝子診断（山口）
- 第21回聴覚障害の検査と評価Ⅰ（山口）
- 第22回聴覚障害の検査と評価Ⅱ（山口）
- 第23回聴覚障害の検査と評価Ⅲ（山口）
- 第24回聴覚障害の検査と評価Ⅳ（山口）
- 第25回聴覚障害児ケースワークⅠ（山口）
- 第26回聴覚障害児ケースワークⅡ（山口）
- 第27回聴覚障害児ケースワークⅢ（山口）
- 第28回聴覚障害児ケースワークⅣ（山口）
- 第29回聴覚障害児ケースワークⅤ（山口）
- 第30回まとめ（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書指定されている「聴覚障害の実際」のⅠ．基礎編を、第1回～10回の集中講義前に読了しておくこと。同じく、「聴覚障害の実際」のⅡ．実践編を、集中講義第11回～14回の集中講義前に読了しておくこと。1年時に学習した検査、補聴器のフィッティングの考え方、言語発達について復習したうえで、講義に臨むこと。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子

出版社：医学書院

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DPとCPの関係はポリシーを参照してください

授業科目	補聴器・人工内耳				
担当者	竹田利一・北野庸子・梅澤尚美・山口忍（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択補聴器適合検査の指針（竹田）

人工内耳の仕組みや適応、マッピング、臨床の実際について学ぶ。（梅澤、北野、山口）

■ 到達目標

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価（竹田）

人工内耳の原理を知り、適応や装着、リハビリテーションの手順について説明できる。人工内耳装用者に対して適切な関わり方ができ、適切なリハビリテーション・調整を提案することができる。（梅澤、北野、山口）

■ 授業計画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第5回 イヤモールドに関する講義（竹田）
- 第6回 補聴器のフィッティングの考え方（リニア、ノンリニア増幅）（竹田）
- 第7回 補聴器の適応と選択、補聴器装用指導（竹田）
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針2010の解説（竹田）
- 第9回 人工内耳の原理、仕組みや適応基準について（梅澤）
- 第10回 音声処理方式とマッピング、人工内耳リハビリテーション（成人・小児）について（梅澤）
- 第11回 難聴幼児の母親指導（北野）
- 第12回 難聴を有する大学生の支援（北野）
- 第13回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第14回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第15回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

1年時および2年時前期に学習した補聴器の仕組み、フィッティングの考え方、適応について復習して講義に臨むこと。第13回～15回は、補聴器期の知識に加え、聴覚障害を来す疾患、検査の適応と内容、手順、聴覚障害のもたらす困難さを社会的・歴史的視点からどうとらえるか、言語発達と聴覚障害の関連など、これまで学んだすべての事を総括する。講義中質問し、口頭で応答を求めます。

■ 教科書

書名：補聴器フィッティングの考え方

著者名：小寺一興

出版社：診断と治療社

書名：聴覚検査の実際（改訂3版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学

著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子

書名：言語聴覚士のための基礎知識 耳鼻咽喉科学 第2版

著者名：鳥山稔

出版社：医学書院

書名：聴覚活用の実際

著者名：田中美郷 廣田栄子

出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	視覚聴覚二重障害				
担当者	大城克彦・田代洋章・大西環・塩見千夏（オムニバス）			国試出題基準	
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①視覚聴覚二重障害について概説する（塩見）
- ②神経難病（ALS など）や脳梗塞など、重度構音障害に対する「拡大・代替コミュニケーション（以下、AAC）」について理解を深める。（大城・田代）
- ③視覚障害者の福祉施設の見学と講義（大西）

■ 到達目標

- ①視覚聴覚二重障害の概要、特徴等を知り理解を深める（塩見）
- ② AAC を活用したコミュニケーション支援を実施する上で必要な情報、評価、制度を含む導入方法などを理解する。（大城・田代）
- ③視覚障害者を取り巻く現状を知り理解を深める（大西）

■ 授業計画

- 第1回 視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について（塩見）
- 第2回 視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモード、事例の紹介、過去の国家試験の解説等（塩見）
- 第3回 拡大・代替コミュニケーションの概論 疾患，文字盤，コミュニケーション機器 ①（大城）
- 第4回 拡大・代替コミュニケーション概論 制度，症例紹介 ②（大城）
- 第5回 各種コミュニケーション機器の使用体験（大城）
- 第6回 身近にあるテクノロジーを支援に活かす方法（田代）
- 第7回 視覚障害者福祉の歴史と現状1（施設見学を含む）（大西）
- 第8回 視覚障害者福祉の歴史と現状2（施設見学を含む）（大西）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の後で復習を行っておくこと

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ ポリシー該当項目

ST：CP ①③④⑤⑥⑦

DP と CP の関係はポリシーを参照してください

授業科目	臨床実習Ⅲ				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・工藤芳幸・中村靖子・塩見千夏 (オムニバス)	国試出題基準			
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	6単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習（総合実習）
設定期間：8週間

■ 到達目標

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。
実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。
「実習のふり返し」を作成する。
症例報告書を作成する。
詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
- ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
- ③ SV からの種々の情報
- ④ SV 記載の成績表・所見
- ⑤ 症例報告書
- ⑥ 実習日誌
- ⑦ 出席状況
- ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ⑨ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
Ⅰ期臨床実習、Ⅱ期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル
著者名：小寺富子監修
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ ポリシー該当項目

ST : CP ①②③④⑥

DP と CP の関係はポリシーを参照してください